資料渉猟余話

その118

大平小洲と八幡郊處

嶋　不濁

平成8年というから10年以上前に信濃毎日新聞社出版局から出版された『大平小洲』巻末の年譜には、明治40年4月59歳のときに東京南画会出品の「不老長春図」が御用品となり、10月日本美術協会展に出品した「宿鴉話寒」(第41回展)が褒状三等を受賞した記載がある。続いて「蓬莱山図」(第43回展)「雪中南天松」(第45回展)も褒状三等を受賞したとあり、その後、大正4年に下伊那郡会議員(67歳)となるが、大正14年77歳の春、成瀬利一(恵美酒銀行頭取・旧姓辰馬)の紹介で山階宮妃殿下に「不老富貴図」、秋、東宮妃良子殿下に「池畔柳桃小禽図」を献上し、翌昭和元年3月78歳で隠居する。隠居にあたって東宮侍従入江為守から喜寿の詞が送られたのに対し、翌2年に昭和天皇に「雪中不老富貴図」を献上したというような、皇室との交流の記述が主で、晩年の小洲の動きはあまりわかっていない。

先般、天龍峡焼(篆刻陶器)を調べていて、岡谷の八幡郊處が草創期の篆刻陶器に深く関わっていたことが次第にわかってきた(伊那谷雑話113～116 20 18・3・16～4・24)が、この郊處を伊那谷に呼び込んだのが、大平小洲ではないかと思えて来た。というのも、大正4年に郡会議員に就任した小洲は公務で長野市に出かけることも多かったに相違ない。八幡郊處印譜の『天龍峡十勝印譜』(大正元年10月刊)には「丁未(明治40年)秋姫城客中」「上柳仁兄」の記述があり、小洲の口絵がありすでに郊處と小洲は知己であったことが知れるが、大正になって原敬の依頼で原の菩提寺の篆額を彫ったり、東都の画家の落款や夏目漱石の印や諏訪大社の東郷平八郎の奉納額を請け負ったりと、大正期に頭角をあらわしていく郊處と、似たような境遇の小洲が、同じ文人墨客として交流がないはずがない。事実、晩年妻を亡くした郊處を小洲が慰めに岡谷に足を運んでいることもわかった。

写真向かって右から3人目が郊處、4人目が小洲
(大正10年11月)

「翁の親友である南宋画の大家大平小洲翁は一日この淋しい友達を慰めるために遥々下伊那の深い谷から出掛けて来た富貴に淫せず世俗に阿ることを知らないこの両老大家が菊の香の佳き南縁に酒を置いて相対する」(「南信新聞」大正10年11月2日)

こうした小洲の気遣いに対し、郊處も大正12年までに3度天龍峡を訪れていることが、郊處が晩年再婚した小千代夫人の所有していた新聞記事のスクラップからもわかった。また小千代夫人の元には「丙寅夏六月拾　龍角亭席上」(即ち大正15年6月　龍角亭は天龍峡名勝の龍角峯にちなんだ旅籠か料亭であろう)と刻まれた篆刻陶器の酒器もあった。現在は係累がその酒器を所持している。また小千代夫人が保存してあった郊處の「知人名簿」(大正12年)にも大平小洲を筆頭に、小西吉太郎(町長)・上柳喜茂(酒造家)、陶芸家の加藤俊治・木下卓斎ら下伊那の名士の名前が並んでいる。

小洲(左)、郊處(右)

小洲は昭和5年3月82歳で、郊處もまた昭和7年12月25日午前1時西堀の自宅で67歳で亡くなった(位牌には24日となっているが、戸籍や新聞記事などから25日が正しいと思われる)。

この二人の、晩年の細やかな情愛に満ちた交流がなければ、篆刻陶器もあるいは別の形態をとっていたかもしれない。今以上に文人同士の交流は密だった。近現代の物質文明の発達は、物の時間と経済の距離は短く簡便にしたが、人と人の交流に限って言えば返って浅薄なものにしたような気がするのは小生だけだろうか。IoTで年寄りをカメラで監視しても、転んだとき暖かい手ひとつ差し伸べられない。遠隔地を厭わず郊處を見舞う小洲らの姿は将来はなくなるのだろうか。